

## 学生の認知症高齢者に対する理解と意識の変化

ーバリデーションプロジェクトでの実践を通じてー

(氏名) 都村尚子<sup>\*1</sup> 家高将明<sup>\*2</sup> 種村理太郎<sup>\*3</sup> 三田村知子<sup>\*4</sup> 鈴木真<sup>\*5</sup> 成清敦子<sup>\*6</sup>

(所属) 関西福祉科学大学社会福祉学部<sup>\*1~3</sup><sup>\*4~5</sup>、関西女子短期大学医療秘書学科<sup>\*4</sup>

キーワード バリデーション、認知症高齢者、学生教育

### 1. 研究目的

本研究は、バリデーションプロジェクトに参加する学生たちの認知症高齢者に対する理解と意識の変化を分析、考察することを目的としている。バリデーションプロジェクトとは、バリデーションについて学び、技術的なトレーニングを受けた学生たちが主体となって、バリデーションを取り入れた認知症カフェを運営する取り組みである。

### 2. 研究方法

本研究は、プロジェクトに参加するメンバー5名を対象にフォーカスグループインタビューを行った。フォーカスグループインタビューの討議は、半構造化インタビューによって行った。実施期間は、2016年2月である。分析方法は、KJ法を用いて共同研究者6名で分析を行った。

### 3. 倫理的配慮

本研究は、各調査対象者に対して研究目的及び内容等を書面及び口頭にて説明し、同意を得た上で実施した。

### 4. 研究結果

本研究の結果、プロジェクト参加前の認知症高齢者のイメージとして、「同じことを話す」「徘徊をする人」「やっかいな人」といったネガティブなイメージが語られ、対応方法として、問題のある「行動を抑制する」「楽しい雰囲気をつくらなければならない」といった考えをもっていた。そしてプロジェクト参加後は、一人ひとりの「個別性」に気づき、「認知症高齢者の行動に意味」があることを理解し、否定的側面だけでなく認知症高齢者がもつ「ストレンガス」にも目を配ることができるようになった。

また認知症高齢者の「気持を考える」ようになり、「共感」することの必要性について認識できるようになった。さらに認知症高齢者へのかかわりについても相手のことを「考えて行動」をとるようになり、自らの姿勢を振り返る「自己覚知」を行うようになった。

よってこれらのことから、プロジェクト参加前において認知症高齢者の障害部分ばかりに目を向け、それに対する対処療法的な対応を考えていた学生たちが、プロジェクトの参加後には認知症高齢者の人間性に目を向け、文脈や相手の反応をみて対応方法を考えることができるようになったといえる。

### 5. 考察

認知症高齢者に対するコミュニケーション法であるバリデーションは、認知症高齢者を理解するための理論的枠組みをもつ。この理論的枠組みについては、これを学習することで認知症高齢者のイメージが変容することが先行研究<sup>1)</sup>において報告されており、本研究はその結果を支持するものである。また本研究における調査対象者は、バリデーションの実践についても体験をしており、これによりイメージの変容だけでなく、相手のことを考え、自らを振り返るなど、自己の変容も認められたと考える。

1) 家高将明 米澤美保子 三田村知子 都村尚子「バリデーションを用いた地域住民対象の研修プログラムがもたらす認知症高齢者に対するイメージの変化に関する研究」日本社会福祉学会（第63回秋季大会）2015年

# 学生の認知症高齢者に対する 理解と意識の変化

－バリテーションプロジェクトでの実践を通じて－

都村尚子<sup>※1</sup> 家高将明<sup>※2</sup> 種村理太郎<sup>※3</sup>

三田村知子<sup>※4</sup> 鈴木真<sup>※5</sup> 成清敦子<sup>※6</sup>

(所属) <sup>※1～※3、※5～6</sup>関西福祉科学大学社会福祉学部

<sup>※4</sup> 関西女子短期大学医療秘書学科

## 研究目的

本研究は、バリテーションプロジェクト  
(以下、バリプロ)に参加する**学生たちの  
認知症高齢者に対する理解と意識の変化を**  
分析、考察することを目的としている。

## バリプロとは

バリデーションについて学び、  
技術的なトレーニングを受けた学生たちが  
バリデーションを取り入れた  
認知症カフェを  
主体的に運営する  
取り組みである。



認知症カフェでのクリスマス会

施設でのバリデーションの実践



バリデーション勉強会

# 研究方法

対象：バリプロメンバーの学生5名  
 調査方法：半構造化インタビューによるフォーカスグループインタビュー  
 実施期間：2016年2月  
 分析方法：KJ法（共同研究者6名による分析）  
 倫理的配慮：調査対象者に研究目的・内容等を説明、同意を得た上で実施

# 研究結果

## バリプロ参加前

**認知症のイメージ**

完全な記憶喪失  
 ・すべて忘れてしまって何もできなくなってしまうとすべて忘れてしまう  
 同じことを話す  
 会話がでない  
 ・繰り返し同じことをずっとループで話して、会話ができない  
 ・マイナスなイメージが多くて、普通の人と会話するように話すことができない  
 誰か介助する人  
 ・徘徊とかやっぱ簡単に考えていました  
 ・徘徊する、同じ動作  
 ・本当に徘徊というイメージしかなかった  
 全介助  
 ・全部介護者がやらないと何もできない人みたいな感じ  
 ・すべて介護する人たちが全部介助して、自分で何もできないというイメージ  
 やっかいな人  
 ・迷惑をかける存在  
 ・とても面倒な人たちという感じ  
 ・手が負えないというイメージ

**認知症の人への対応**

質問的  
 ・会話の中で広げなと思いつつも、絶対何か知らなアカンというのがあった  
 ・「今日何して遊んでいたんですか」とか、そういう相手のことを知ろうとして聞く質問をしたり  
 行動抑制  
 ・ダメダメと書いていて、その代り、意識をこっちにむかせようかしていた  
 ・やったらダメみたいな、取り上げたりしがちやと思う  
 楽しさの押し付け  
 ・全部楽しいことにすり替えじゃないですけど、しやなアカンのやな、と思っていた  
 ・全部笑顔であったりとか、悪い印象を持たれへんような会話じゃないとアカン  
 ・「それは大変ですね」とか言っとけばいいのかな

→

**無理解無関心**

・認知症について理解していなかった  
 ・今まで関心が高かった

## バリプロ参加後

**認知症の人の捉え方**

認知症のイメージ変化  
 ・行動とか言っている言葉に対して見るイメージが変わった  
 ・行動と言葉とがしっかりとした意味があるということが分かって、こういうのを解決してほしいのだから  
 ・意味ある存在と言う見方になった  
 ・認知症高齢者もちゃんと応えてくれる  
 認知症の人の行動には意味がある  
 ・繰り返して話されることにはそういう意味があったり  
 ・意味がない行動やおもったことには、実は意味があって、その背景にはその人の感情とかそういうものがあるから考えて何かを考えながら生きていらしゃる  
 ・最初は無気味な感じがたどるところに気づかしてもらった  
 ストレングス  
 ・この人はこんなこともできるんや  
 個別性  
 ・認知症という病気の中でできることは、個人それぞれ  
 ・ひとそれぞれなんやと思える  
 ・人それぞれできることとできひんことがほまんに違う

**向き合い方への理解**

コミュニケーションの本質  
 ・記録を書くためにコミュニケーションをとっていたのではなく、どう思っているのかを知りたいと思ってコミュニケーションをとるのとは、考えてみてみたら違ってた  
 ・情報をもらうために話さなアカンという形で話さなくなった  
 コミュニケーション可能  
 ・何を言っているのかという部分が受け取ることが出来たり  
 ・コミュニケーションがとれる  
 認知症の人の行動の意味を理解することで安心する  
 ・ちゃんと理由を懸いたら、もっとその人にならな、安心してその場で暮らしていいのかな  
 ・受け入れることによって、その方たちも安心できる  
 共感  
 ・怒ったりかいるんな喜怒哀楽があるものを一緒に共感じゃないんですけど、一緒に出ているもい  
 ・「こんなことで怒っているんですね」とかそういうのを言ってもいいんやな  
 相手の気持ち考える  
 ・（認知症の人が）どんなことを思っているんだろうと考えたりすることも多くなって  
 ・今こういう気持ちだろうと自分なりに考えられるように意識し始めた  
 ・自分の行動に対して、利用者がどう受けとめるのかということを考えるようになった

**関わり方**

考えて行動する  
 ・この人はなんでこういふふうにはんのやろなと言う風に感じたり、一歩前段階で、自分の中で考えたり  
 ・自分なりにいろいろ考えるようになりました  
 ・全部が全部ではないですけど、ちょっとだけ考えて行動に移すようになった  
 自己覚悟を行う  
 ・自分の行動とか、相手を向き合う姿勢というのが変わりました  
 強制しない対応  
 ・危険を除去した上で、ある程度自由に行動してもらえようかな空間をつくっていくということの方が大事  
 ・「これがやりたいんやったら、こっちにしよう」とか、近いもので対応しようという自分の考えが変わりました

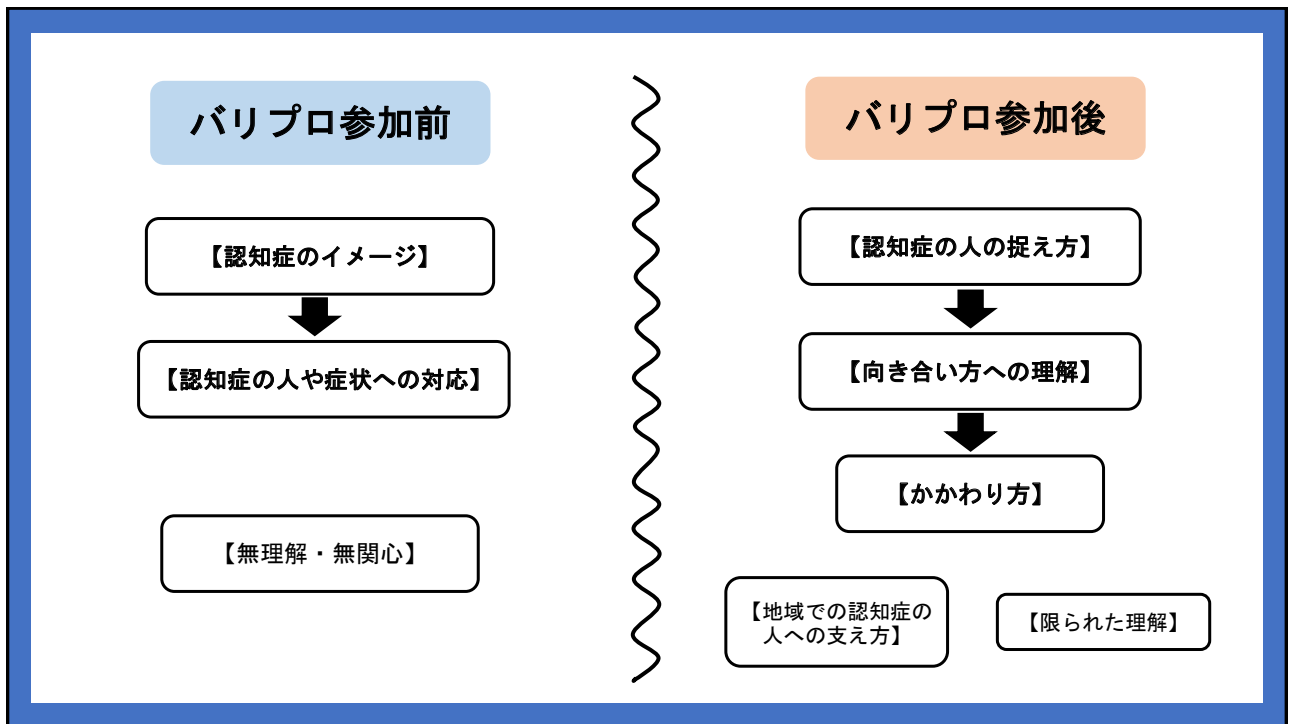
→

**地域での認知症の人への支え方**

・社会資源というファームというものが  
 ・地域で連携し助けていく  
 ・認知症の方の支援を地域でやっていくのを字ばしてもらった

**限られた理解**

・認知症は意味通ができないことを初めて知りました  
 ・同じことを繰り返し繰り返し、動作をする



	バリプロ参加前	バリプロ参加後
認知症高齢者のイメージ	「同じことを話す」 「徘徊をする人」 「やっかいな人」と いったネガティブなイ メージが語られた	一人ひとりの「個別性」に 気づき、「認知症高齢者の 行動に意味」があることを 理解し、否定的側面だけで なく認知症高齢者がもつ 「ストレングス」にも目を 配ることができるように なった

	バリプロ参加前	バリプロ参加後
認知症高齢者への対応方法	問題のある「行動を抑制する」「楽しい雰囲気をつくらなければならない」といった考えをもっていた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 認知症高齢者の「気持ちを考える」ようになり、「共感」することの必要性について認識できるようになった。</li> <li>・ 認知症高齢者へのかかわりについても相手のことを「考えて行動」をとるようになり、自らの姿勢を振り返る「自己覚知」を行うようになった。</li> </ul>

バリプロ**参加前**の学生たちは、認知症高齢者の**障害部分ばかりに目を向け**、それに対する**対処療法的な対応**を考えていた



バリプロ**参加後**の学生たちは、認知症高齢者の**人間性に目を向け**、**文脈や相手の反応に沿った対応方法**を考えることができるようになったといえる。

## 考察

認知症高齢者に対するコミュニケーション法であるバリデーシオンは、認知症高齢者を理解するための理論的枠組みをもつ。

この理論的枠組みについては、これを学習することで認知症高齢者のイメージが変容することが先行研究<sup>1)</sup>において報告されており、本研究はその結果を支持するものである。

1) 家高将明、米澤美保子、三田村知子、都村尚子「バリデーシオンを用いた地域住民対象の研修プログラムがもたらす認知症高齢者に対するイメージの変化に関する研究」日本社会福祉学会（第63回秋季大会）2015年

バリプロの学生は、バリデーシオンの実践も体験しており、これにより認知症高齢者のイメージの変容だけでなく、相手のことを考え、自らを振り返るなど、**自己の変容も認められた**と考える。

ご清聴ありがとうございました

